

## <喜び> を探し求めること

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24615">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24615</a>

## 〈喜び〉を探し求めること

大学、ホ教主任 原 田 浩 司

フィリピの信徒への手紙第四章四〜七節

4 主しゅにおいて常に喜びよろこなさい。重ねて言いいます。喜びよろこなさい。5 あなたがたの広い心こころがすべての人ひとに知られるようになりなさい。主しゅはすぐ近くにおられます。6 どんなことでも、思おもい煩わづらうのはやめなさい。何事なにごとにつけ、感謝かんしゃを込めて祈いのりと願ねがいをささげ、求もとめているものを神かみに打ち明あけなさい。7 そうすれば、あらゆる人知じんちを超える神かみの平和へいが、あなたがたの心こころと考かんがえとをキリスト・イエスによつて守まもるでしょう。

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」。日本語に訳すと「喜びなさい」という命令口調になってしまうのが多少残念な気がしますが、英語では「Rejoice! リジヨイス」、どちらかと言えば「喜ぼうよ」と相手にも喜びを促すニュアンスだと思えます。「さあ、共に喜ぼう」。今日の聖書の言葉は、聴き手に喜びを促しています。

さて、今年（二〇一四年）は、児童文学『赤毛のアン』を翻訳するなど、数々の児童文学を日本に紹介した作家・翻訳家、村岡花子さんの生涯を描いたNHKの朝の連続ドラマ小説「花子とアン」が話題になりました。皆さんの中にも「赤毛のアン」を知っている、とか読んだという人もいるでしょう。では、村岡花子さんが翻訳した『少女パレアナ』という児童文学はご存知でしょうか？「赤毛のアン」なら聞き覚えはあるけど、「少女パレアナ」は聞いたことがない、という人は多いかもしれません。今からもう約30年前の一九八六年に、日本では「愛少女ポリアンナ物語」というタイトルで、一年間、TVアニメーションとして放送されました。この作品も、実は世界的によく知られる、20世紀を代表するアメリカ児童文学の一つです。知らなかったという人は、文庫本で出ていますので、是非読んでみて欲しいと思います。

少し、この物語に触れますが、主人公がパレアナで、彼女の母は、もともと由緒ある良家の娘でしたが、家族全員の反対を押し切って、駆け落ち同然で、貧しい青年牧師と結婚しました。そしてこの結婚を機に、家族とはまったくの絶縁状態になってしまいます。結婚した二人の間に生まれた娘が、主人公のパレアナです。しかし、パレアナが生まれて数年の間に、母が、父が、という具合に、相次いで病に侵され、亡くなってしまふのです。一人っ子で、どこにも身寄りのないパレアナは、亡き母の妹である「叔母」に引き取られることとなりますが、その叔母の屋敷では、

最も粗末なみすぼらしい屋根裏部屋があてがわれました。要するに、歓迎されていないことは明白でした。しかし、パレアナはそれでも、いつも明るく振る舞います。そんなパレアナの明るさやユーモアに影響を受け、大変気難しい性格の叔母をはじめ、周りの皆が次第次第に変わっていく。これが大まかな物語の流れです。

さて、この物語になぜ触れたのか。それは今日の聖書の言葉と関係しているからです。主人公の少女パレアナはどんな苦境や逆境の中でも、ある秘訣で、自らの明るさを保ち、心の優しさと平安を取り戻していきます。その「ある秘訣」というのは、牧師だったお父さんから常々教えられた「喜びの遊び（よかった探し）」と名付けられたゲームでした。このゲームは何であつても、どんな時にも、そこに何か「喜び」を見つけ出すというゲームで、物語の中で、パレアナはこのゲームをこう説明しています。「ええ、『なんでも喜ぶ』ゲームなの。…分かるじゃないの、ゲームはね、何でも喜ぶことなのよ。喜ぶことを、何の中からでも探すのよ。なんであつてもね」。パレアナは、どんなに悲しいことや辛いことがあつても、父から教えられたこのゲームを思い出し、どんなことの中にも喜びを見つけ出すとする。すると、よかったこと、喜びを見つけては、明るさをとりもどしていきます。パレアナが友達に教えたこのゲームは、彼女が住む町全体にどんどんどんどん広がっていき、人々が喜びをさがしては、明るさを取り戻し、少しずつ変えられていきます。

ある人から見れば、この物語は子供向けのうまい話、うまい寓話にすぎない、この世の現実はもつと厳しく、そんなゲームごときで、自分が置かれた厳しい現実を変えられるわけではない。そんな風に考えるかもしれない。しかし、この物語は、何か物事の見方を変えれば、状況を変えることができるといった処世訓を、子どもたちに語り聞かせようとしているのではありません。辛くて悲しいけれど、少し見方を変えれば、その痛みが和らぐ、と教えているのでもないのです。厳しい現実の中でもなお、喜びを見ることができるようになる、どんなに辛いことや悲しいことの中からも、そこにどっぴりと埋もれることなく、喜びを見つけ出すことができる根拠があるのだ、と伝えているのです。

この物語は、明らかに、フィリピの信徒への手紙のパウロの言葉が下敷きになっています。パウロは「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」と繰り返して語ります。当然のことですが、わたしたちは「喜びなさい」と言われて、すんなり「はい」と言つて喜べるわけではありません。しかし、よかったことを探す、喜びを見つける、という視線、姿勢は、一人ひとりの生き方を、内面を変えていきます。「花子とアン」の主題歌になった絢香さんの曲「にじいろ」の歌詞に「なくしたものを数えて瞳閉ざすよりも、あるものを数えた方が瞳輝きだす」というフレーズがあります。失ったものを数え、悲しみを数え、苦しみを数えるよりも、そのような中にも、

あるいは、それでもなお、よかったことを探す、喜びを数え、喜びを探す。そこには人間を輝かせる強さがあります。

さらに、パウロは「喜びなさい」と言いますが、その喜びの原因、喜ぶ根拠が果たして何なのか。パウロはそのことを繰り返し、重ね合わせてこう言っていました。「主において常に喜びなさい」。悲しみの中にも、あるいは苦しみの中にも、主なる神があなたと共に、私と共に寄り添っている。必ず神がそのような暗闇と思えるような中にも、わたしと共に、あなたと共にいてくださる。神が必ずそこにもいてくれる。聖書はそのことに気付くことが、大きな力になることを、わたしたちに伝えます。